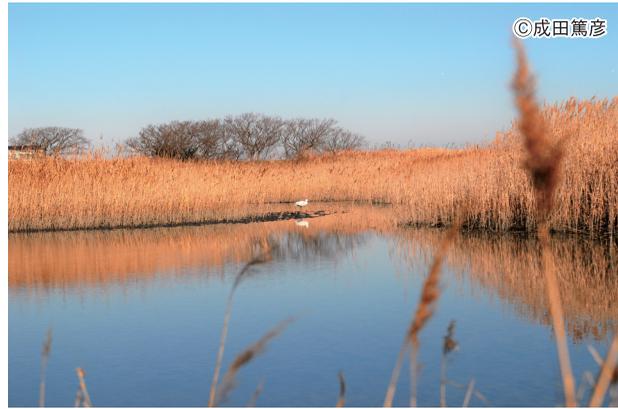


かずさの博物誌

ヘラサギ ～ふくよかな水鳥～

文・写真／成田篤彦

2017.12.20



©成田篤彦

▲ヘラサギの飛来地＝2016年1月10日 木更津市



©成田篤彦

▲飛ぶヘラサギ＝2015年12月20日 木更津市



©成田篤彦

▲小沼で休息するヘラサギ

＝2015年12月20日 木更津市

「ヘラサギです」と一昨年の晩秋に写真添えて友人から、メールがきた。

トキ科のヘラサギは、県内にはきわめてまれに飛来する冬鳥で、珍客中の珍客だ。

早速、ヘラサギが来そうな海岸に出かけた。

小櫃川河口の塩性湿地を訪れた時、エノキの上空を、首を伸ばして飛ぶやや太めの白い鳥がいた。

「しゃもじのようなくちばし、あ！ヘラサギ」と後を追うと、ヨシ原の中にある小沼に降りた。

ここにはハゼやボラなどの小魚やゴカイなどがたくさんいて、いつも一羽のダイサギがえさを捕っている。

そこで、ヘラサギが半開きにしたくちばしを眼元まで水中に差し込み、素早く弧を描いて左右に振ってくちばしの間に小魚を宙に浮かせ、飲み込んだ。

ダイサギがヘラサギに近づき、威

嚇したが、ヘラサギはどく吹く風であつた。

しばらく、水中を動き回っていたが、岸辺に上がり、くちばしを背に入れ、一本脚で立ち、眼を閉じた。

ヘラサギは日本の各地にまれに飛来するが、繁殖の記録はない。県内では過去に市川市新浜、浦安市、一の宮などの干潟に、秋から冬にかけて渡来したことがある。

さて、江戸時代の一七二一（享保六）年に江戸上野の不忍の池で数羽みられており、江戸での鷹狩（一七二九、一七六四、一七六六年）でも得られている（磯野直秀著2005 慶応義塾大学日吉紀要・自然科学No.37「珍禽異獣奇魚の古記」）。

これらのことから、明治以前には現在よりも多く訪れていたらしい。同時に彼らの生息地の湿地が江戸に広がっていたこともうかがえる。また、本朝食鑑（一六九七元禄一〇）年刊には「鵞鷺と記載され、人はまだこれを食べていないのでその気味についてはわからない（人見必大・

島田勇雄訳注1977本朝食鑑2 東洋文庫312）」とある。

同じ仲間のトキは江戸時代には日本全国で繁殖しており、ヘラサギは江戸時代でも絵に画かれているものの、数が少なくトキほど人々との関係は濃くなかったようだが、しゃもじのようなくちばしには江戸人も興味をそそられたらしい。

ちなみに、ヨーロッパではオランダの国鳥に指定されている。

いずれにせよ、しゃもじのようなくちばしをもつふくよかで美しい、この水鳥が、上総にいつ来ても良いように、えさの豊富な湿地の環境を残しておきたいものである。



©成田篤彦

▲ダイサギ（左）とヘラサギ（右）
＝2015年12月20日 木更津市



©成田篤彦

▲首をかくヘラサギ
＝2015年12月20日 木更津市

memo

ヘラサギ

ペリカン目トキ科

全長八十六センチメートル。シラサギに似ている。ユーラシアとアフリカ大陸の温帯地方に繁殖地をもち、日本には冬鳥として渡来。くちばしを左右にふり、触れた昆虫、小魚などを捕らえる。

参考文献

房総の草木虫魚226号ヘラサギ
千葉日報一六年三月二十日